

第2回 香南市まち・ひと・しごと創生総合戦略策定委員会 議事録

- 開催日時：令和5年2月21日（火）14:30～16:30
- 開催場所：のいちふれあいセンター2階 研修室
- 出席委員：受田浩之委員長、石丸典男委員、小笠原由美委員、中脇正人委員、古川和佳委員、田中愉之委員、三浦裕司委員、別府誠委員
- 事務局：浜田商工観光課長、岩田地域支援課長、澤田農林水産課長補佐、小松こども課長西内企画財政課長、近藤企画財政課長補佐、中川、宮崎

【次第】

1. 開会
2. 市長あいさつ
3. 委員長あいさつ
4. 副委員長選出（あいさつ）

5. 議事
 - (1) 令和4年度の目標達成状況（進捗状況シート）及び令和5年度の新たな取り組みについて
 - (2) 「魅力ある香南市をつくるアンケート調査」について
 - (3) 第2期香南市まち・ひと・しごと創生総合戦略の改訂について
 - (4) デジタル田園都市国家構想総合戦略に基づく地方版総合戦略の改訂について

- 事務局
 - (1) 令和4年度の目標達成状況（進捗状況シート）及び令和5年度の新たな取り組みについて
 - (2) 「魅力ある香南市をつくるアンケート調査」について説明

- 委員長 事務局からそれぞれ説明をいただいた。二つそれぞれとして説明したように聞こえるかもしれないが、これまでずっと議論してきた内容というのは、香南市の未来を担っていく子どもたち、小学生中学生、或いは若い18歳の皆さんに対して、まち・ひと・しごと創生総合戦略が具体的に企画や実施をされていることによって、実感として香南市に対する愛着が生まれ、それがさらに強まっていて、地域に対してより定着をしていくような形になると、全体が繋がっていくのではないかと。KPIを設けて、農林水或いは商工や観光移住の数値目標を立てて、それがどれだけクリアしているかという視点で、香南市としての行政的なPDCAを回していることになるが、これが数値として実行できて、実現したとして果たして住民の目線で見ると、住みたいまちになっているかというところは、十分には把握はできない。だから、子どもたちに対するアンケートを実施し、これを連動させていくことによって、本当に実効性のあるまち・ひと・しごと創生総合戦

略が、展開されているかどうか、ここを見ていきませんかという話で、3年前からアンケートが実施されている。34市町村の中でこういった形の総合戦略の実施と、それをモニターしながら実効性のある、行政施策として進めているというのが香南市の特徴である。市長の重視する子育て環境においても、当然同じ文脈にあり、市の行政課題の中心であるというふうに私も理解している。その点も含みおきをいただき、例えば資料1の、農業に関する取り組みについて、ご質問やご意見を賜っても結構ですし、その成果としてのアンケート結果について、議論していただいても結構ですので委員の皆様から、それぞれの視点でご質問やコメントをいただければと思う。

■委員 香南市で住んでいる子どもたちが、現実的にはまだなかなか帰ってこないだろうと思う。そして人口をある程度増やそうとした時に、外からの移住、関係人口や交流人口を増やすことも大切ではないかと思う。その中で、新聞で市長がメディアの方と対談しているのを見て、そこで結構LGBTの方とか、今回もその方々を呼んでの講演会があるが、そういった尖った、ともすれば保守派と言われる人たちにさんざん言われそうな、同性婚のことにしてもかなり踏み込んだことをおっしゃっている。私はそういったことが、香南市以外の人たちにすごい大きなインパクトになるのではないかと、また香南市の良いところは前も、坂本先生から聞いたときに、明石市では子育てする人が増えているようなことをしていますが、やっぱりトップダウンである。香南市はやっぱりボトムアップして、それでそれを、市長はじめ、議員・職員の方たちが、しっかりとその施策を進めてくれると。そういったことを考えると、やはり大きなインパクト、尖ったものというのが非常に大事だと、これは一歩間違ったら毒薬にもなるのですが、そして香南市が非常に明石市と比べた時に、明石市は神戸があってそれで明石がある。この香南市を、高知市があり、そして南国市があって、割と香南市から高知市へ通う人も多くいるので、そしたらすごい香南市って何かやはりこの真ん中には子育て、それもただ子育て世代だけに手厚くするのではなくて、香南市全体で子育てをする。そしてまた年配の方はもちろんわかっていると思うが、子どもたちに人口が減ると大変になるということ、子どもたちも理解していますし、年配の方たちも、もちろんわかっていると思う。そういったことを啓蒙し、香南市全体で育てていくような環境ができれば良いと思う。キーワードになるのは、市長の言う共に生きるということ。中には、職員の方は地域の人からクレームがあり大変な思いをしている場合もあると思うが、そういう人たちも一生懸命、生きているわけですから、慈悲の気持ちで、やっぱり共に生きるという優しさというか、そういったことも必要だなと思う。

■委員長 LGBTのお話や、最後に共に生きる優しさ、よく言われているインクルージョンという言葉があり、包摂という言葉をよく使う。インクルージョンというここを強調しながら、包摂社会を創っていくことを特徴として考えていってはどうかっていうお話と、市全体で子育てをという点についても、大変重要なポイントだと私も思っている。資料1-8中に、3世代交流事業についての取り組みの記載があり、県の施策においても非常に重

要視されており、ファミリーサポートセンターの取り組みにも繋がっていくでしょう。数字的に言って3世代同居というのが、全国の数字でどの都道府県が高いかという統計データがある。その統計データを見ると、北陸の方が3世代同居の比率が日本の中で際立って高く、そこの出生数が相対的に高いということが数字でも表れている。この辺りも大きなヒントではないかなと思う。3世代同居を今からどうやって実現させていくかというのは、簡単な話ではありませんし、それを維持できるようにしていきながら、一方で、そうではない場合にファミサポを充実させて子育て世代の方々に、より安心して子育てができるように、また不測の事態や、緊急対応とか特に子どもさんが発熱したり、病児保育などの制約をどうやって克服していくかということが課題になっているということではないかと思う。

■市長 私自身、常に心がけていることは、この時代の中で様々なツールを使って、メッセージをいかに発信していくかということだと思っている。冒頭の委員長のお話にありましたが人口減少というのも確実に進んでおり、県内においても各市町村で人口の囲い合いや取り合いということが現実にある。そこでいかに魅力的なサービスを提示していくか、香南市というのはそれを、私が市長になって、中期財政計画であったり予算編成の中において様々なこと、そして委員長からお褒めの言葉いただいた香南市まち・ひと・しごと創生総合戦略においても取り組んでいる。しかし、もう一段階それを、見える化というか、ある種尖ったメッセージというのをを出していくことによって、県内において家を建て、子育てをしようといった方が、どこに住むってなった時に、一番に香南市がなれるということを目指している。それをどうやっていくのかにおいて、明石市を私も魅力的で参考にしてはいるが、市長と市民が非常に近く、そしてメッセージも強いですが、限られた予算の中で、子ども施策を一気に行っておられるところがある。私は少しバランスといいますか、どうやってそれを受けていくか、そしてまたそれを全体として優しく、まさにインクルージョンで市民全体の方向を徐々に向けていきたい。一気にやると反対側も出てくる。例えば学校現場とかでも時々聞いて私もすごく心を痛めておるのが、インクルーシブ、これは教育であったり、社会もそうですが、そうなることによって一定それに受け入れられない部分に対して、許容することができていない方がいるので、そことのある種衝突であったり、行き違いの問題が出て、やはり混乱というか、それによって傷つく方が出ておられる。できるだけ少なくしていければなと思っている。3世代交流事業についても、先日、凧揚げ大会を実施させていただいた。そこでは、私自身も知っているような、おじいちゃんおばあちゃん、お母さんお父さん、そして子どもさんが来て、まさに三世代で野市の凧揚げをやっていただき、私自身も子どもと参加した。それと香南市でやっていかなければいけないのは、古くからおじいちゃんおばあちゃん世代からいる地区の方もいるし、また野市を中心に新しく入ってきた方々に、特に私は自分がみどり野団地出身ですから、香南市に地縁がない、血縁がない状況で、4歳の時に引っ越してきて、今では近所の方が私のおばあちゃんやおじいちゃんであるといった団地となっている。いかに香南市で今できている団地で、地域が家族であって、知って

いる近所のおじさんが自分の親父、おじいちゃんとかですね、そんな感覚を持っているようなまちづくりっていうのをどうやってしていくかということが、まさに魅力を作っていくことだと思っている。それを限られた予算の中でやっていきたい。

■委員 現在香南市では非常に宅地化が進んでおり、農業委員をやっている中、農家でもあり今後農業やっていく状況が厳しいと感じている。そういった中では人口の増加については、非常に大事なことはないかとは思っている。それ以外に農業関係の方でも後継者が、一応この数値的には目標値を上回っているが、やはり現状ではかなり少ない状態で推移をしている。そういった中で宅地化の中で農業がしにくい状況になってきている。後から入ってきた人が強いのかなと思っている。やり易いように農業していかないと、続かないと思っている。そういった中、農業振興地域には振興地域で残してもらって、宅地化が進められるところはもう進んでいくと、いうふうな形で線引きをしてもらって大体バイパスから南側が振興地域とバイパスから北側が宅地化、市役所から300メートル範囲、のいち駅から850メートル範囲についてはもう宅地化が2種農地として許されている現状である。農業だけではなくて、どの企業も大変であると思っている。先ほど言った宅地化の中で今、香南市へ移住してこられる中でも、3000万で建てられていた家が今3500万、4000万出さないと建たないような状況になってきている。お家もそうですし、農業関係も非常に厳しい状況である。農業関係ではハウス栽培も厳しいですがそれ以上に、路地栽培が厳しい。コロナの3年間で、外食産業が冷え切っており、お米の消費が伸び悩んでいる。そういった中で米の価格も低迷しており、1袋5000円ぐらいで16俵とって一反で10アール当たり8万円ぐらいしか収入がない。田植えをしてもらって、コンバインで稲を刈ってもらって、苗大、肥料代の薬剤、すべて入れますと8万円ではできない。やればやるほど赤字なのです。そういった中さらに高齢化も進んでおり、香南市の農地につきましてはJAのオペレーターと、香南市の開発公社の方がかなり広い面積を管理してくれておりますが、一般の農家も20ヘクタール30ヘクタールと、作ってくれていました農家が高齢化で、30ヘクタール分栽培していた人が10ヘクタールに減るということで、20ヘクタールの遊休地が出てくる可能性も出てきている。これほど米が低迷している中、作れば作るほど赤字の米農家がこれから育っていくのかという現実、厳しい状況にもなっている。学校給食米とか、いろんな部分で取り組んでもらうということを書いているが、いかに遊休地を増やさないように、米農家を大事に育てていくという気持ちもやっぱり大事になってくると思う。僕は農業関係にかなり力を注ぎながらやっていきたいと思っている。厳しいことばかり言っているが、この農業だけではなく、他の分野でも厳しいという状況のご報告をさせていただいた。

■委員長 現状として特にお米を生産されている農家の皆さんが苦勞されている様子を、具体的にご紹介いただいた。宅地と農地の住み分けの部分は、もともと香南市においてゾーニングを明確にしていき、そこからこの議論が始まっているので、そこはしっかりと線引きされているのではないかというふうに思う。今の話を伺っていてまさに数値目標を立

てて、その数値目標だけが達成できれば、合格のように見えてしまうが決してそうではない。現実の世界として、強調していただいたことかと思う。

■事務局 宅地化により農業がしにくいという点で、以前に私の方でお聞きしたことがあるのが、新規で就農された方が、実際そこで農業やっという事で、計画をされてやっていた方がいらした。ただ、その周りが宅地化されて、農業ができなくなったという事例も聞いている。昨年の夏場に、農地の周りが宅地になって、その畑の草刈をして置いていたのが、台風の風で飛ばされるから何とかしてくれという話もあって、先ほど委員が言われた現状というのが理解できる。また米の価格ということで、現在肥料とか資材とか、燃料の高騰等により、国県市の支援事業とかもあるが、なかなか生産者が農作物を売るという時に、価格転嫁ができてないような状況も見受けられて、作れば作るほど、経費がかかって赤字になるという状況である。令和5年度から、農業関係の法令も変わり、今後地域計画を立て、将来の農業のあり方を地域で取り決めて、将来誰が後継者として、その土地でやっていくという目標地図の作成ということも、令和7年の3月に向けて策定していくようになる。その辺も踏まえて地域に入り、お声を聞きながら将来農業が続けられるような集積等の実行できたらと思っている。

■委員長 大事なことは宅地と農地のすみ分けの土地の利用形態ということの立地適正化ということだけではなく、住民の方と農業を営んでおられる方との意識のすり合わせの部分をやっというかないと、結局共存していくということが難しくなっいき、軋轢が生じていくことになるでしょう。特にこの意識のすり合わせの部分、例えばこういう子どもたちに対してのアンケートをうまく分析をしながら、何らかの形でその行動に移していけるようなことがあると、発展的な話になっていくのではないかなと考える。

■委員 私は香南香美南国の広域観光協議会に所属している。弊社の代表が常々、これからは香南香美南国3市が集まって、高知市に続く第2の都市になるのだということを言っている。委員長から出生数の話を聞いたときにぞっとした。今日の午前中に、山田高校の校長先生とお話する機会があり、来年度の入学希望者が定員割れをしそうだということで、大変悩まされていた。校長先生の話聞いていて、納得したのですけれども、香南の子たちがどこに行ってしまうのかというやはり、高知市を目指してってしまう。でも、最終的に山田高校を出ても高知市内の高校出ても、行き着く先は同じ大学であったり、就職であったりする。同じ先なのにやはり高知市内で遊びたい、休みの日には定期券でイオンに行って遊びたい、そういう気持ちを持って行ってしまうということ言われていた。この3年前に小学校6年生であった子たち、中学校3年生であった子たちが、来年度のアンケートでどのような回答を出されるのかすごく楽しみにしている。弊社が本年度ワーケーションという事業を行った。都会で働く方々に、この香南市や、香美南国に来てもらって仕事をしながら観光してもらおうという事業を実施した。こっちに来て何がしたいかということ聞くと、先に挙げられるのがまず林業を経験してみたい

と言われる。それから農業経験してみたいと言われているので、今回のいろいろな数値目標を見ていたが、すごく興味のある人たちがたくさんいて、実際の数字に結びついていたり、結びついていなかったりするのだと思うが、興味がある人たちをいかにそこに結びつけていけるのか、香南市に来てもらえるのかというところを、もう少しひも解く必要があるのではないかと感じている。今年度そのワーケーションの事業をして観光庁の方から言われたのが、弊社の方が子育てファミリーというものをターゲットに観光客誘致をしているので、次年度はその子育てファミリーの子どもを連れたワーケーションを誘致してみたらどうかということは今言われている。何をしたらいいのかというと、まず親は仕事をするだろうと。今持っている仕事をする。子どもをその期間、受け入れてもらえるような先があるとベストだと。高知県内でも何校か、県外の子どもたちを受け入れて、一般家庭で子どもたちを預かって学校に行かせているというところがあるが、本当に1週間とか短い期間だけれどもそういった留学ができるような学校とか、幼稚園や保育所などがあると良いということを言われており、次年度からは協議会などを立ち上げてそういった方法も考えてみたいと思っている。そういったワーケーションなどの最終的に行き着く先は、やはり移住定住であるだろうと思っているので、私どももそういった方法で最終的な香南市の目標のところに行けるようなことができたかなと思っている。

■委員長 特に観光の視点から、関係人口の確保をしていくということに繋がっていく。具体的な方法として、子連れのワーケーションのような展開というものもあるのではないかな。途中高校の進学のお話もあり、私は大学にいるので、高校の話は関係ないというふうに思われるかもしれないが、大学も全く他人ごとではなくて、先ほど申し上げた、2022年の出生数77万人が、18年後の私達の大学の市場を形成しますので、今の110数万人がいる市場がほぼ3分の2になる。もうこんなに大学は要りません、この定員をどうやって満たすのですかという、とんでもない未来の危機感をみんな抱いている。その途中の幼小中高校、はもっと早くその実態が押し寄せてくるので、今のお話は私たち自身の足元の火種といいますか、危機感だと思ってお聞きしていた。ワーケーションを移住と繋げていくというのは市としても議論しているところではないかと思うがいかがか。

■事務局 ワーケーションとはまた違うが、地域支援課ではワーキングホリデーという形で、香南市内にある産業のところで働いてもらう。そして香南暮らしを体験してもらい取り組みを進めている。以前にお試し滞在住宅を香南市に設けた時に、委員がおっしゃってくれたことを考えたことがある。子育てファミリーは子どもの教育環境とか保育の受け入れ体制がどうなのかというのをすごく考える。そういった時に、保育所や幼稚園で受け入れてもらえるのか、もらえないのかということ、議論をしたことがある。その時にやはり、今の保育現場で香南市にいる子どもですら、受け入れられる体制が整っていないという問題が解決していないところもあって、そういったところを解決して、今いる住民の方、さらに入ってきてほしいという方を両方受け入れる体制が、整ったら良いなと思

っている。

■委員長 交流人口から関係人口になり移住定住人口になっていく時に、やっぱり外から来られる方にとって魅力的であるということは、もともと内部にいらっしゃる方にとって、とても満足感が高いという地域であることが前提である。内部にいらっしゃる方にとって魅力が、仮に欠落しているとする、外の方に来ていただくという体制にはまだないということになってしまう。ですから、その部分を徹底的に足元がどういう状況であるかということを追求しながら、問題点があればそれを一つ一つ克服して、どの地域にとっても誇らしい地域であるというところから、是非我が町にという話に持っていくことが自然な流れではないかなと思う。それがうまくいってなかったら、せっかく移住してこられた方が、一定の期間でまた別のところに移住してしまうという、定着率の問題というところにまた課題が発生する。この辺りを一つずつクリアして行っていただきたい。

■委員 農業の分野でお話をさせていただきたい。このアンケートを見ても、年齢が高くなるに連れ香南市で魅力的な働く場所がないというふうに考える子どもたちが多くなっていて、おそらくその中に農業が一つの選択肢に入る子どもがどれくらいの割合がいるのかと思ったときに、実際には農業を働く先として考える子どもは少ないのではないかと感じた。ただ、私自身はUターンをしてきて、農業を始めた身としては、香南市の農業ってすごく魅力的な働く先として、すごくやってみたいという子どもたちを今後増やしていけたら良いと個人的には思っている。先ほど委員がおっしゃられたように、農業は今すごく厳しい状況にある。肥料や資材が高騰しており、その分価格転嫁できないので、利益が非常に少なくなり、また高齢化も進んでどんどん衰退していくところではあるのですが、だからこそこで何かしら今までと違う手を打っていかないと、どんどん駄目になっていくのではないかとすごく危機感を感じている。私自身農業をやってみて、十分に利益は出せていますし、都会でサラリーマンしていた頃よりは、はるかにストレスも減り、香南市で暮らすことはすごく自分としては良かったと思っている。そういう人たちを増やしていくためにはどうしたら良いかと思った時に、農業に一步踏み出しやすい環境づくりが大事だと思っている。来年度以降に耕作放棄地解消に向けて動いてくださるとか、香南市内に今住んでいる方を限定として新規に始められる方に補助金を出されていますけど、それをちょっと市外からの方にも広げるようにこの資料にも出ている。香南市には、畑がたくさんありますけど、高知市とか、周りのところにはないので、香南市で就農したいけど市外に住んでいる人たちが、そういう補助金を受けられるようになったら香南市の農業が盛んになっていくと思う。耕作放棄地になってしまってから、再生するよりもならないように、相続をするタイミングや、高齢化してきた方たちへの何かアクションを起こすことによって、耕作放棄地の数を減らして、有効な農地を減らさないことによって、何とか農業を繋いでいくことができるのではないかなと思う。私たちのところでアルバイトを雇っており、コロナの前にも募集を出したが、その時にはほとんど反応がなかった。しかしつい最近では30代、20代後半の若い方がかなり応募し

てくれた。私たちの場合フルタイムではなくパートタイムになるのですが、それでも将来的に農業をやってみたいので、取っ掛かりとしてちょっと働いてみたいという方が非常に多くて、だからコロナでやっぱり働き方の考えも変わったと思うし、若い農業に興味があるという、人たちが結構増えているのかなと思う。そういう人たちを何とか農業の世界に本格的に足を踏み入れてもらえるように、ちょっと引き上げてもらえるような施策を考えていただけたらありがたい。

■事務局 農業を働く先として考える子どもが、増えたらということについて現状としては学校関係に農業体験ということで、お米を育てたり野菜を育てたりする授業についてはやっではいる。ただ、仕事として実際の農家さんの所へ行ってというのが実施されていないのが現状である。そういう体験ができるようなものができたら思っているが、現状ではそこまで至っていない。今後将来のことを考えて、そういう子どもに農業だけに限らず、漁業などの魅力を伝えていければと思っている。市外の方を対象にということで、今の農業関係のハウスの整備事業などは、市町村によって対象となる人が違う。仮に南国市の人が香南市で耕作をしている場合、属人であれば対象にならない。ただ南国市が仮に属地が対象だとなればその方は対象にならないとか、そういうことがあるので、近隣の市町村も含めて情報共有し、今後どうしていくのかを広域的に考えていかなければいけないと思っている。続いて耕作放棄地対策では、なかなか難しく課題にはなっているが、地域の方と一緒に農業されている方、あと中山間とか多面とかの事業の組織で、市もそうだが来年度は農業公社の人員も増やさせていただき、その辺の対策を今後どうしていくかの仕組みづくり等も考えていきたいと思っている。難しい対策だと思うが、今後の農業が続けてできるように考えて参りたい。

■委員長 ニラに関してはIOPのプロジェクトをやっていることをご存知かと思うが、全体のプロジェクトの事業責任者を私が務めており、昨日も東京でIOPの国際シンポジウムをJA共済会館で開いてきた。知事や前知事に来てもらい、相当な関心をもって日本中と世界からアクセスしてもらってあること実感している。今後、生理生態AIエンジンの開発を通じて、ニラやナスの農家の皆様が完全にベンチャーの最先端起業家であるという位置付けになってきている。農業の就農体験をやっているのではなくて、まさに農業×DXの最先端を現場で実践していただいている進化系である。ここをその子どもたちに体験をしてもらうというのは、全く違うものを提案していることになると思う。生産性を上げていき、そのことが今の農業資材や肥料の高騰をどう克服していくかということで試算しているデータなんかも日々拝見をしているが、IOPでの生産効率の高まりで克服できるという、そういう数値データもたくさん見せていただいている。そういうところでもっともっと、生産現場として多くの皆様にご関心を持っていただくと、必ずここ高知から変わっていく。耕地面積当たりの農業産出額は、日本でもぶっちぎりのトップですから。先ほど委員の言われた路地とはちょっと違う話ではありますが、やっぱり高知の強みである施設園芸農業で世界のトップになる、それを目指していける地域であるって

いうことが、研究の展開とともに、実質的に見られるようになっていく。

■委員 資料2-1の107ページをご覧いただきたい。委員になってから何回か言っているが、香南市の暮らしでは災害に対して安心できるまちだと思いますかという問いに対して、赤岡・夜須・吉川の小学6年生に関しては5割から6割、中学生3年生になると7割近くの子がこれはやばいと。勉強すればするほど、これはやばいと思いながら日々過ごしている中で、これは生死に関わる問題だと思うのですが、そういう不安の中で将来のこととか、楽しいこととかという以前の問題だと思うので、この不安は何をやっても残ると思うのですけども、もう少しこの数値を減らすような心のケアと言いますか、これだけ市としてはやっていますというような。小学校のこの地域の小学校校長になると、いろんな責任問題でなり手が嫌がるという現場の声も聞く。そういう先生もいるのに、子どもが安心できるわけじゃないですから、これはやはり香南市として、命にかかわる問題です。心のケアというか、これだけしていますというのを示していただければと思う。

■市長 まず何よりも、私も含め香南市で一番守らなければならないのは、子どもの命ということは、大前提でもう当たり前のことである。しかし、委員ご指摘の通りにこれに完成はないにしても、まだできていない部分があることが当然あると考えている。しかしそれは本当にこれまでに一番大切なことであるが故に、いろいろなことを考えると踏み込めなかったことや、いろんな部分であるのではないかと自分なりに思っている。そこは教育長とも話をし、所属各課長とも共通して、来年度以降はまず一番大事にすることは、この命を守るために我々は何をするのかということ、具体的に行動に移していきたいと思っている。当然それによって、ある種の反発や、いろいろな思いが出てくることはありますが、それでも受けとめてでもやらなければならないということ。昨年に宮城県の女川と石巻に行って、町長と市長さんからそこは恐れるなと、やらなければならないとアドバイスいただいた。それを自分の肝に銘じて、自分の使命だと感じて取り組んでいきたいと思っている。ハードの部分だけではなく心の部分も、委員がおっしゃりたい部分は、むしろ心の不安ではないかなと思う。そこは、災害からの命を守ることだけじゃなくて、コロナにより様々なことが子どもたちに、これまでなかった影響が出ていると思っている。それをどうやって、健康というか心に負担がかからないようなものを作っていくか、これは健康対策課、学校教育課、こども課を含めてですね、市全体としてまず子どもの命と、気持ちとそしてまた暮らしを大切にできるまちというものを示していかなければならないと思っている。そこはしっかりと取り組みたいと思っている。

■委員長 アンケートの結果と、そのあとの自由記述のところに、どうあって欲しいかということが、ハードとそれからソフトと両方の意見として認められている。この部分に寄り添っていくことによって、この数字がどう変化をしていくか、特に安心感を子どもたちがどのように持って、変化をしていくことが可能なのか、数字はモニターしながら毎年アンケートをやっている定点観測を、有効に活かしながら、取り組んでいただければと思

う。こんなふうにアンケートを取りながらまた地区別に、或いは年代別を取っているということが、基礎データとして非常に重要である。今の委員のご意見に対して、これから改善の変化を皆さんで描いていただければ思う。

■委員 本場に地域の現場の皆さん方々のお陰だと思っている。資料1-4を拝見しております。来年度の新たな取り組みの、香南市では野市町を中心市街地とした位置づけで、今年度この中心市街地の活性化計画を策定されている。具体的にこれからはこの計画に基づいて商店街を振興していきましょうということになる。実は野市には商店組合、振興組合的な団体が実は存在していない。車で走っておりますと、県外の大きなお店がまず目に入り、それでよくよく見ると、地域の個人商店が実はたくさんあるという構成をしている。一方で赤岡のように、昔ながらの商店街があるというところで、今回は野市町を中心とした中心市街地という位置づけを市としてされて、実行計画を立てているのですけれども、実はこの来年度の予算で新たに補助金メニューを作られて、実際にどんどん振興していきましょうと。前回のこの会でも言わせていただきましたけれども、野市は人口が増えている非常に珍しい地域である。そういった方々が地元にお金を落とすということも大切なことですので、ぜひ市街地をどんどん振興していただきたいということを、市の方々にもご協力いただきたいと思っておったところで、こういった補助金メニューを作っていたのでありがたく思っている。補助金のメニューの詳細に触れられる範囲で構わないのでご説明いただければと思う。

■事務局 中心市街地活性化計画につきましては、昨年度にワーキンググループを複数回開催いたしました。地域の事業者の多くの皆さんが参加していただき、なんとか作り上げてきたところである。先ほど委員からもございましたが、現在実行体制について確立させていくような取り組みを進めており、来年度につきましては県単の補助をいただき、県が2分の1それから市の方で4分の1足しまして、4分の3助成事業という形で、実行していただくグループの方に4分の1は自己負担になる。体制まだ確立はしておりませんが、地域中心市街地の事業者の皆様方で実行委員会組織を作ってくださいような形で、市や商工会の方が事務局としてサポートをし、それぞれ事業者の皆様の取り組みを後押しできるよう取り組んでいきたい。また仕掛けといたしましても、回遊の仕組みづくりや、市内中心市街地の近くには観光施設もございますので、そこに来られている観光客をこのエリアを引っ張って来ると言いますか、案内して中心市街地が活性化するような取り組みを一緒に進めていくような形での補助金となっている。

■委員長 先ほど委員から観光振興における香南・香美・南国の連携というところを提案頂いたので、是非そういった点についても、今後の連携をよろしく願います。

■委員長 大分予定の時間をオーバーしているので、議事1・2については、ここまでで区切りを入れさせていただいてよろしいか。

■委員 異議なし

■委員長 それでは残りの議事3と議事4の議題に入って参りたいと思う。ここも一括でご説明をお願いする。

■事務局 (3) 第2期香南市まち・ひと・しごと創生総合戦略の改訂について
(4) デジタル田園都市国家構想総合戦略に基づく地方版総合戦略の改訂について
説明

■委員長 まず議事3の総合戦略の改定に関して、ご説明をいただいたがこの改定の内容について、ご質問或いはご意見があればいただきたいと思う。細かい所は省略されているが、一部数値目標や、KPIの変更、人生支援計画終了の関係により、微調整していく部分がメインだったかと思う。

■委員 異議なし

■委員長 議事4については、これまで慣れ親しんだ総合戦略がデジタルにどうのこうのと一体どうなるのだろうという、委員の皆様にとっては素朴な疑問だと思う。前もこの場で申し上げたかもしれないが、国の霞ヶ関に行くところまでは、まち・ひと・しごと創生本部という看板が出ていましたが、ところが去年の6月ぐらいからその看板が全部付け替えになって、すべてデジタル田園都市国家構想という名前にあつという間になり、まち・ひと・しごとは一体どこへ行ったという寂しさと、豹変の国の体制について私も驚いたというのが実態であった。考え方としては冒頭申し上げたとおり、まち・ひと・しごと創生総合戦略というのは、基本は人口ビジョンである。人口が減っていくことを、何とか下げ止め、少し上げていく方向をそれぞれ人口ビジョンとして県も39万人を55万7000人にまで下げとめるという目標を掲げている。ご当地においても、その人口ビジョンを社人研予想に何とか抗っていこうとしている。それを実現するための総合戦略を今議論していただいている。ただ、なかなか国も苦戦しているということ、1718市町村全部をご覧になられていて実感として感じてしまっているので、もっと効果的にやるためにデジタルの力を駆使していきましょうという話になって、このデジタル田園都市国家構想総合戦略という名称が変わっていくということになる。ですから、スタートは同じであり、そのデジタル活用する重みを少し増していきましょうということ。今日はもう多分詳細な説明はないと思いますが、委員構成なんかもこのデジ田に対応するように、デジタルに精通している人を委員の中に入れていきましょうとか、或いは連携をもっと進めていきましょう。連携中枢都市圏という取り組みも、今高知県で進んでいますのでそういうのもしっかりやりましょう。参考資料の2で1枚ものがありますが、この下の方をご覧いただくと、例えばさっきの地域防災力をどう上げていきますか、デジタルの

力を使えるのではないかというのが、下から2段目の一番右側にあり、観光のDXで展開ができるのではないかと。テレワークの話や子ども政策の話。そして、アンケートの結果は公共交通機関の問題点が相当出ていますけれど、これもMaasとかを活用していったらどうか。その横に、産学官協創都市という、これ高知県と高知大学のIOPが国のモデルとして、取り上げられているということで、こういうところにもちょっとご関心を持っていただきたい。こういう成功事例や先端的な事例を香南市で取り入れることによって改善といった、今後より目標を早期に達成できるような形ができないかというように、積極的に応用してそこに国の支援を呼び込んでもらえるという、そういう枠組みでフル活用していただければいいのではないかと思っている。この全体像だけではわかりにくいところがありますが、先ほどの事務局からのご説明によると、少し県の様子を拝見した上で、市町村としては改訂作業に入る。こんな位置付けで考えていくということですが、これが一般的であると思う。じっくりと取り組んでいき、こういうDXに関してはアジャイルという言葉を使って、取り入れられるところを片っ端から取り入れて、修正すべきところはどんどん修正しながら、まずスモールスタートしていけばいいんじゃないかという考え方で、積極的にやるべきではないかと思う。ちょっと補足させていただいたが、よろしいでしょうかこのような形に進んでいくということで。

■委員 異議なし

■副委員長 本当に長時間ありがとうございました。本当にいろいろな課題や本当に安心して安全に暮らせる環境づくりが必要、或いはその農業の厳しい現状とか、委員から楽しく農業しているというような話もありましたので、是非そういうふうなですね、香南市民の方が、本当に生きがいといいますか、いきいき働けるような環境づくりに何とか取り組んでいきたいというふうに考えております。できるだけ今日のアンケートにあるような子どもたちにしっかりキャリア教育といいますか、知っていたような取り組み、或いは高校とか大学の関係で、どうしても香南市から離れることあるかもしれませんが、戻ってきてもらえるような郷土愛を育むような取り組みとか、とにかく子どもにターゲットを絞った取り組みで、丁寧にやっていかなければならないと感じたところであります。引き続きまた、頑張りたいと思いますので、よろしくお願ひしたいと思います。

■委員長 それでは議事3に続いて議事4の議論に関しても、ここまでとさせていただきますと思う。

6. その他

(1) 今後の策定委員会のスケジュールについて

7. 閉会